

紀元41年から44年まで王位に就いていたヘロデ・アグリッパ一世という王が、ゼベダイの子ヤコブを剣で切り殺した。それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、次いでペトロをも逮捕した。ところが、主の御使いの不思議な導きで、その厳重な牢からペトロは救い出された。とても現実のこととは思われなかったが、しかし、「**ペトロは我に返って言った。『今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ』**」(11節)、このことに気付いた。

これに続く出来事を描くのが今日の12節から19節である。

## 12節

**「こう分かるとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。」**

**「マルコと呼ばれていたヨハネ」**、この人物はこの後25節にあるように、アンティオキア教会からやってきたバルナバとサウロが同行してアンティオキア教会へ連れて行く、そういう若者である。

2世紀の伝説によると、この**「マルコと呼ばれていたヨハネ」**が、第二福音書、一番古い、一番短い、いわゆるマルコによる福音書の著者であると、伝えられている。

更に、その福音書だけが伝えていることであるが、マルコによる福音書14章51節52節で、主イエスが捕えられる時**「一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとする、と、亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった」**という逸話が伝えられているが、この**「若者」**こそ実に**「マルコと呼ばれていたヨハネ」**であると考えられてきた。そうすると、このマルコは十字架に架けられる前の主イエスについていた最初期からの信者であるということになる。

このマルコは、パウロの伝道旅行にも同伴するが、最初は途中で一人だけ帰ってしまったことでパウロの怒りを買って、その結果、次の伝道旅行の際には、それまで一緒に伝道旅行をしていたパウロとバルナバが、彼を同行させるかどうかのことで意見が激しく衝突、その結果、二人は別行動をすることになった、その原因となった(使徒15章17節以下)。

しかしずっと晩年になると、パウロはテモテへの手紙二の4章11節で**「ルカだけがわたしのところにいます。マルコを連れて来てください。彼はわたしの務めをよく助けてくれるからです」**、こういう評価を与えている。更に、今度はペトロの手紙一の5章13節で、ペトロが、**「わたしの子マルコが、よろしくと言っています」**、そういうふうに**「わたしの子」**という呼び方をしている。

だから、この**「マルコと呼ばれていたヨハネ」**は、バルナバはもちろんのこと、パウロからもペトロからも非常に信頼を受け評価された立派な伝道者になったわけである。

この若者の「母マリアの家」。“マリアの子マルコ”というのではなくて、むしろ「マルコと呼ばれていたヨハネ」の「母マリア」というのだから、よほどこのマルコはエルサレムのキリスト者の中で中心的な、大事な働きをしていた古顔であったと思われる。そのお母さん「マリアの家」と言われている。

この家は、「大勢の人が集まって」祈祷会をしているし、門を叩いた時にロデが家に駆けこんで門はそのままという、この構図から見てもかなり立派な大邸宅だったと思われる。

そこで、6世紀ころからの伝説では、主イエスが最後の晩餐を開いたエルサレムの「広間」(ルカ 22:12)、並びに使徒言行録の1章13節で、主が昇天された直後、弟子たちが「泊まっていた家の上の部屋に上がって」祈ったとある「泊まっていた家」、この両方が「ヨハネと呼ばれていたマルコの母マリアの家」ではないか、そういうふうと考えられてきた。

そこに「大勢の人が集まって祈っていた」というのは、夜中に祈祷会を開いたという最初の証言である。

しかし、この後17節ではペトロが「このことをヤコブと兄弟たちに伝えなさい」と言うから、もちろんこのマリアの家に集まっていた「大勢の人」の他に「ヤコブ」や「兄弟たち」も別にいたわけで、従って5節で「教会では彼のために熱心な祈りがささげられていた」という「教会で」の「熱心な祈り」の一部が、今現に「マリアの家」で集まっている祈祷会であり、他にもあちこの家の教会で祈りがささげられている、そういうのではないかと思われる。

#### 13-15 節

「門の戸をたたくと、ロデという女中が取り次ぎに出て来た。ペトロの声だと分かると、喜びのあまり門を開けもしないで家に駆け込み、ペトロが門の前に立っていると告げた。人々は、「あなたは気が変になっているのだ」と言ったが、ロデは、本当だと言いつ張った。彼らは、「それはペトロを守る天使だろう」と言い出した。」

「ロデ」(Ρόδη) というのは、「バラの花」「ばら」という意味の名前である。

ロデの言葉を受けると「人々は」二通りの反応をした。一つの反応は、「あなたは気が変になっている」という反応。もう一つは、もしそうでないとすれば『それはペトロを守る天使だろう』と言い出した。」

#### 16 節

そうやって皆が対応している間に、「ペトロは戸をたたき続け」たので、人々は戸を「開けてみると、そこにペトロがいたので非常に驚いた」。

#### 17 節

「ペトロは手で制して彼らを静かにさせ、主が牢から連れ出してくださった次第を説

明し、『このことをヤコブと兄弟たちに伝えなさい』と言った。そして、そこを出てほかの所へ行った。」

「手で制して彼らを静かにさせ」。これは、たった今、牢屋から脱獄してきた状況を考えて、いつ追っ手が来るかも分からない状態である。それに、ペトロはさっきから必死になって門を「たたいて」いた。もし、この場で皆が「驚いて」騒いで、あちらこちらで大きな声すと、真夜中の静まったときであるから、きっと見つかってしまう。だから、“静かに、静かに”と「手で制し」て、簡単に事柄を「説明し」て『このことをヤコブと兄弟たちに伝えなさい』と言った」。

ここに出てくる「ヤコブ」というのは、2節に出て来た「剣で殺」された「ヨハネの兄弟ヤコブ」、ゼベダイの子であるヤコブではない。ガラテヤの信徒への手紙1章19節で、パウロが「主の兄弟ヤコブにだけ会いました」と言っている「主の兄弟ヤコブ」である。

マルコによる福音書6章3節では、ナザレのイエスについて“この男はどうしてこんなに知恵があるのだろうか”と皆が驚いて話す時に、「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか」と話している「ヤコブ」である。

主イエスの兄弟たちは、主イエスが十字架に架かる前は決して信仰を持っていなかった（マルコ3:21、ヨハ7:6）。でも使徒言行録1章14節によると、十一弟子たちは「婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」というふうになっている。そこで、主イエスが昇天されるまでには、この兄弟たちも信仰を持つようにならなっていたことが分かる。

恐らく、その転換は、コリントの信徒への手紙一の15章7節に書いてある通り、復活の主が「ヤコブに現れた」という復活の主イエスの顕現に接したために信じるようにならなっていたのだと思われる。

このようにして、主イエスの復活から信仰を持つようになり、昇天後はずっと熱心に弟子たちと共に祈っていた「ヤコブ」は、この後、使徒言行録15章のエルサレム会議などで議長役を務めるといふ非常に重要な、エルサレム教会の中心的な位置を占めるようにならなってくる（21:18、ガラ2:12参照）。

「ヤコブと兄弟たちに伝えてくれ」という「兄弟たち」という表現は、使徒言行録1章15節の祈禱会の後の次、「ペトロは兄弟たちの中に立って」、十二番目の使徒を補充するという演説をする。この「百二十人ほどの人々」を「兄弟たち」と呼んでもいる。また11章1節の「使徒たちとユダヤにいる兄弟たち」という言葉が出てくる。

これらのことから「兄弟たち」というのは、恐らく、エルサレム教会の中で「使徒」に次いで指導的な立場にある人々、最も古くから教会にいて何かにつけて指導的な位置にいる人たちのことを言っているのではないかと思われる（6:3、9:30、11:29、15:7、13、22）。

「他の所へ行った」の「他の所」というのは、その次18節19節で「ペトロを捜して

**も見つからない」とある通り、恐らく隠れ家に隠れたということであろう。**

殺すはずの囚人ペトロが脱獄して行方不明になっているので、ヘロデ・アグリッパは、番をしていた兵士たちを「**死刑にするように命じ**」、自分はエルサレムから「**カイサリアに下って**」行った、いう。

これが、ヘロデ・アグリッパによる迫害の物語の全体である。

どうして、ルカはこの出来事をここに書いたのだろうか。

一口で言うと、これは、1章からずっとこれまでのところでエルサレムのキリスト教の姿を中心に書いて来たが、そのエルサレム・キリスト教会の記事は終わり、次の13章からはアンティオキア教会の海外宣教という全く新しい別の教会の働きに筆を移すために、この12章という1章を書いていると思われる。

この出来事の2, 3年後、飢饉が襲い、アンティオキア教会からバルナバとサウロが救援物資を持って届けてくれる。そして、そのバルナバとサウロはエルサレム教会から、「**ヨハネと呼ばれていたマルコ**」という青年を連れてアンティオキアに戻っていく。エルサレムのキリスト教にすれば、最初期から働いたよい青年が一人、いなくなる。

更に、このエルサレム・キリスト教会を指導してきた十二使徒の三羽鳥と言われたペトロとヤコブとヨハネ、このうちの「**ヤコブ**」は殺され、「**ペトロ**」は牢屋から出たもののとりあえずヘロデに捕まらないようにどこか隠れ家に行ってしまう。もう、エルサレム教会の指導には当たらない。「**このことをヤコブと兄弟たちに伝えてくれ**」、そう言ってペトロもいなくなったのである。

ゼベダイの子ヤコブが殉教され、シモン・ペトロが居なくなった後、エルサレム教会は實際上「**主の兄弟ヤコブ**」と言う新しい人物に指導される、こういう時代が変わる。

この12章は、ヘロデの迫害とそこから奇跡的に逃げ出したペトロの方に気を取られやすいが、しかし、1章から12章までずっと続けられたエルサレム・キリスト教会の方から言うと、これは大変なことが起こった時である。教会員は皆熱心に祈った。でもヤコブは殺される。そして、ペトロは居なくなる。そして、あの若いマルコもアンティオキアへ行ってしまう。そして、教会は主の兄弟ヤコブに委ねられるという、そういう変化が起こったことを、この章は伝えている。

このような変化があっても24節「**神の言葉はますます栄え、広がっていた**」と伝えられている。教会の指導者は、あるいは中心的な人は代わっても、「**神の言葉は**」びくともしない。「**ますます栄え、広がって行った**」のである。

万軍の主は生きておられる。教会の頭である主イエス・キリストは生きて働いておられる。

「**アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。**」(コリント一 3:5-7)。